

視点と日本語の無生物主語

斎 藤 伸 治

1. はじめに

他動詞文において、無生物主語を用いることがどの程度可能か、あるいは実際にどの程度よく用いられているかは、言語によってかなり違いがある。例えば、ギリシャ語では普通、人間(や他の生物)を主語にして文が構成されるのに対して、同じことを述べるのに、ラテン語では、無生物や抽象的観念を主語として文が構成される傾向がある。ラテン語同様に英語も、無生物主語が多用される言語であり、そのために、例えば、英国の学校で子供達たちにはじめてギリシャ語の作文を教える際に、ギリシャ語ではできるだけ人間を主語にして文を作るように、というような注意がわざわざなされるということである¹⁾。日本語を学習する場合も、英語の母語話者は、やはり同様の注意が必要とされるだろう。日本語も、他動詞文の場合には、英語と比べて人間を主語とする傾向が強く、(1)のように無生物を主語とした場合、座りが悪かったり、翻訳調に響く場合が多いと言われているからである。

(1)? 何が彼女の気持ちを変えたのか。(cf. なぜ彼女は気持ちを変えたのか。)

日本語において、どの程度無生物主語が容認されるかについては、文体上の理由なども含めて、様々な要因がからんでいるものと考えられる。しかし、その中でも、これから特に焦点をあてて考察してみたいのは、比較的論じられることの少ない補助動詞「～てくれる」を含む場合である。西村(1997: 196)では、(2)のように「～てくれる」を用いる場合と用いない場合とでは、容認度に大きな差が生じてくるということが指摘されている。

- (2) a. この本は有益な情報を提供してくれる。
b. その博物館は私に歴史の重要性を理解させてくれた。
c. 友人との歓談の一時が一学期間の疲れを癒してくれた。

つまり、補助動詞「～てくれる」を用いることによって、無生物主語の容認度が高くなる場合があるということである。また、次のような無生物主語を含む文でも、「～てくれる」が用いられていることで、自然な表現になっている、ということも間違いないだろう。

- (3) a. この日は空もよく晴れていて、栗の林に囲まれた広い馬場の芝生の中で走る馬の姿は、それまで麻痺していた矢代の感覚を擦り落してくれた最初の生き物の美しさだった。

1) 柳沼(1991: 218-19)。

(横光利一『旅愁』)

- b. あの、遠くから聞えて来た幽かな、金槌の音が、不思議なくらい綺麗に私からミリタリズムの幻影を剥ぎとってくれて…
(太宰治『トカトントン』)

このように補助動詞「～てくれる」を用いることにより、無生物主語の容認度が上がるのはなぜなのだろうか。更に、この条件は、無生物主語に関するより一般的な条件とどう関係するのだろうか。このような問題を中心に、以下、考察を進めていきたい。

2. 他動性と無生物主語

「～てくれる」を用いた日本語の無生物主語他動詞文について考察する前に、まず無生物主語そのものについて、これまでにどのようなアプローチがとられているのかをみておきたい。最近の一つの大きな研究の方向としては、無生物主語の容認可能性をその文の述語を中心とした他動性ととの関わりで考察するという方向がある。つまり、原型(プロトタイプ)的な他動詞文(あるいは使役文)を定義して、無生物主語他動詞文をそこから逸脱したより周辺的な成員、あるいはある一つの方向への拡張として考えるという立場である。例えば、Taylor (1995) や西村 (1997) では、英語の無生物主語に関してそのような考え方を採っている。また、日本語の無生物主語に関しては、井上 (1994) 及び、井上 (1994) に基づいた大曾・滝沢 (2001) の研究がある。以下、大曾・滝沢 (2001) の議論を中心にみていこう。

大曾・滝沢 (2001) は、井上 (1994) に従い、まず形式の上では、項を2つとり、ガ格-ヲ格という格表示をもつ文を原型的な他動詞文と考える。更に、(i) ガ格名詞の意図的動作、(ii) ヲ格被動者の変化、(iii) ヲ格被動者に対する直接的作用、(iv) 述語の非状態性という4つの意味素性を設定し、それらの意味素性の有無によって、他動詞文を次のような9つのタイプに分類している。勿論、4つの意味素性すべてを備えたタイプ((4a) 動作主他動詞文)が最も他動性の高い、原型的な他動詞文ということになる。

- | | |
|----------------|----------------------|
| (4) a. 動作主他動詞文 | 学生がパソコンを壊した。 |
| b. 不変化他動詞文 | 子供たちが戸をたたいた。 |
| c. 中立的他動詞文 | 観衆は音のする方を見た。 |
| d. 自然現象他動詞文 | 津波が海浜の部落を襲った。 |
| e. 無意志主語他動詞文 | 明は免許証をなくした。 |
| f. 経験者他動詞文 | 国民は選挙法の改正を喜んでいる。 |
| g. 原因他動詞文 | 過度の野心が彼の寿命を縮めた。 |
| h. 道具他動詞文 | 白い布が机を覆っている。 |
| i. 優位関係他動詞文 | 今回の提案はいくつかの問題を含んでいる。 |
| j. 場所他動詞文 | 川が町の中心を流れている。 |

主語に着目すれば、(4d) 自然現象他動詞文、(4g) 原因他動詞文、(4h) 道具他動詞文、(4i) 優位関係他動詞文、(4j) 場所他動詞文の5つのタイプにおいて、無生物主語が可能になっている。つまり、日本語では無生物主語の他動詞文は不自然であるとか、座りが悪いということがよく言われるが、実際には、タイプの数だけからみれば、無生物主語の可能な他動詞文は案外

多いということになる。意味素性をみると、例えば (4i) 優位関係他動詞文の場合、4つの他動詞文の意味素性すべてを欠いており、残り3つのタイプの場合でも、「ガ格名詞の意図的動作」という意味素性に加えて、他にも幾つかの意味素性を欠いている、と大曾・滝沢 (2001) は述べている。つまり、無生物主語が可能な他動詞文とは、原型から離れた周辺の他動詞文ということになるわけである。

同様の分析が、英語の無生物主語他動詞文についても、あてはめることができるだろう。ただ、日英両言語において大きく差が生じてくるのは、原因他動詞文に関してである。大曾・滝沢 (2001) も指摘しているように、(4g) で挙げられている例文は、日常的な会話文ではあまり使用されることが多くないように思われるし、また、実際のところ、原因他動詞文は、英語では多くみられ、日常会話表現としてもごく自然であるが、日本語では不自然で、原因に相当する部分を副詞的に表現しなければならない場合の方が圧倒的に多い。

- (5) a. Hard work killed her father.
- b. 過労で彼女の父親は死んだ。
- c. *過労が彼女の父親を殺した。
- (6) a. What brought you here?
- b. なぜあなたはここに来たのですか。
- c. *何があなたをここに連れてきたのですか。

したがって、日本語に関する限り、無生物主語をとる他動詞文の一つとして原因他動詞文を含めるのは疑問であると言わざるを得ない。ところで、そもそもこの原因他動詞文というのは、本当に原型から離れた周辺の他動詞文なのだろうか。無生物主語をとれば、当然、主語の意志性という意味素性は欠けてくるわけであるが、それ以外の意味素性はどうかだろうか。

他動性の原型を定義するための意味素性としてどんなものを設定すべきかという問題に関しては、これまでも幾つかの提案がなされてきたが、主語の意志性を他動性の原型を定義する基本的な要素と考える点では、大方一致している (例えば、Hopper and Thompson (1980), ヤコブセン (1989), Taylor (1995), 西村 (1997) など)。井上 (1994) 及び大曾・滝沢 (2001) の場合も同様で、4つの意味素性の一つとして、「ガ格名詞の意図的動作」を挙げている。これに対して、角田 (1991) は、他動性の原型を「動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす」(角田 (1991) : 72) と定義し、被動作性こそが他動性の原型を定義する上で最も基本的な意味素性であり、意志性の方は無関係であると論じている。そのように考えるべき理由として、角田 (1991) は、ある言語において他動詞文の格表示ができるかどうかを左右するのは、ほとんど常に、意志性ではなく被動作性の方であることを指摘して、英語とジャル語から例を引いている²⁾。

英語では、よく知られているように、動詞が直接に項をとる場合と前置詞を介在させている場合では、意味上にも違いが生じる。‘I hit him.’ と ‘I hit at him.’ を例にとると、その違いは次のようにまとめられる (角田 (1991 : 83))。

2) ジャル語は、オーストラリア西北部、西オーストラリア州に分布するオーストラリア原住民語。ジャロ語ともいう。

- | | 格 | 意志性 | 被動作性 |
|------------------------------------|-------|------|------|
| (7) a. I hit him.
(私は彼をたたいた。) | 主格—対格 | 言及なし | + |
| b. I hit at him.
(私は彼をたたこうとした。) | 主格—at | + | 言及なし |

前置詞 at をとる (7b) の場合には、「狙った」という意味 (意志性) はもつが、実際に命中したのかどうか (被動作性) に関しては言及がないのに対して、逆に前置詞 at をとらない (7a) の場合には、命中したことは保証されるが (被動作性)、それを意図的に行ったかどうか (意志性) に関しては言及がない。意図的に行った場合も、偶然にたたいてしまった場合も、どちらもあり得る。これらの例から分かるように、他動詞文の格の実現 (主格—対格) と関係するのは、被動作性の方であって、意志性ではない。

角田 (1991) に従って、今度はジャル語の例をみてみよう。ジャル語の例も、同様に、他動詞文の格の実現と意志性が無関係であることを示している。

- | | | | |
|--------------------|-------------------|-------------|------------|
| (8) a. ngatyu-ngku | nga-rna-φ | ngumpirr-φ | pat-man-i. |
| 1 単 - 能格 | - 1 単・主格 - 3 単・対格 | 女 - 絶対格 | 触る - 過去 |
| (私は女に触った。) | | | |
| b. ngatyu-ngku | nga-rna-la | ngumpirr-ku | pat-man-i. |
| 1 単 - 能格 | - 1 単・主格 - 3 単・与格 | 女 - 与格 | 触る - 過去 |
| (私は女に触ろうとした。) | | | |

角田 (1991) によれば、ジャル語の他動詞文の格は、名詞や代名詞では「能格—絶対格」で、付属代名詞 (clitic pronouns) では「主格—対格」で表される。(付属代名詞は、必ず何か他の単語の後ろに付着しなければならない要素であり、(8)においては、nga がその付着先となっている。nga は、付属代名詞の付着先という役割しかもたない、ということである。)(8)の事実は、(9)のようにまとめることができる。

- | | 代名詞, 名詞 | 付属代名詞 | 意志性 | 被動作性 |
|------|---------|-------|------|------|
| (8a) | 能格—絶対格 | 主格—対格 | 言及なし | + |
| (8b) | 能格—与格 | 主格—与格 | + | 言及なし |

先の英語の例と同じように、他動詞文の格の実現と関わるのは、被動作性であり、英語の例でもジャル語の例でも、意志性はむしろ他動詞文ではない方の例と結びついている。

以上のように、他動性の原型の定義において基本的な要素となっているのは、意志性ではなくむしろ被動作性の方であるとする角田 (1991) の主張が正しいとすれば、無生物主語をとる原因他動詞文は、むしろ他動性の高い文ということになる。というのは、無生物主語をとる原因他動詞文は、何らかの意味での被動作性を常に含意しているからである。例えば、次のような交替を考えてみよう。

- (10) a. John taught Mary English.
b. John taught English to Mary.

(10a) のように行為の及ぶ相手 (Mary) が前置詞 to の付かない間接目的語で実現される場合、行為の達成 (つまり Mary が実際に英語を習得するという事) が含意されるのに対して、(10b) のように前置詞 to の項として実現される場合には、そのような含意はない。この場合、Mary は、英語を習得したかも知れないし、しなかったかも知れない (詳しい議論については、Green (1974: 156-58) を参照)。注意すべきことは、Green (1974) も指摘するように、主語として無生物を選択できるのは、(10a) のような場合であって、(10b) のような場合ではない、ということである。

- (11) a. Being criticized taught John criticism.
b. *Being criticized taught criticism to John.

この例からも分かるように、無生物主語の原因他動詞文が可能なのは、被動作性を含意する、したがって他動性の高い構文の方であって、その逆ではない。もう一つ、同様の例として、今度は2つの動詞 rob と steal を比べてみよう。一見すると、これらはほぼ同義語のようにも見えるが、Goldberg (1995) も指摘するように、相手が深刻な影響を被ることを含意するのかもしれないのか、という点において、両者は異なっている。以下にみるように、rob はそのような含意をもつが、steal にはそのような含意はない。steal と異なり、rob は、被害を受けた相手が大きな悪影響を被った場合にしか用いることはできない (12-13の例文は Goldberg (1995) からの引用)。

- (12) a. I stole a penny / money / a lock of his hair from him.
b. *I robbed him of a penny / money / a lock of his hair.

rob が容認可能となるためには、13にみるように、被害者は大打撃を受ける必要がある。

- (13) I robbed him of his last penny.

そして、原因他動詞文として、無生物を主語にできるのは、rob の方であって、steal ではない。

- (14) a. The shock robbed him of his speech.
(彼はショックで口がきけなくなった。)
b. Their complaints robbed him of peace of mind.
(彼らの苦情を聞いて安らかな気持ちが乱された。)

(市川他編 (1995))

これらの例からも、無生物主語を容認するのは、他動性の高い構文の方であることが分かる。この原因他動詞文の場合には、被動作性が強まれば強まるほど逆に意図性は弱まり、その結果無生物主語がとり易くなっていると言えるのではないだろうか。角田 (1991) が主張するように、他動性を定義する基本的意味素性が被動作性であり、意図性は無関係であるとする、このタイプの他動詞文は、少なくとも、原型的な他動詞文から離れた周辺的なものとみなすことはできないことになる。前述したように、この原因他動詞文は、日本語では自然さに欠けていたり、翻訳調の響きのある表現である³⁾。英語では自然な表現ではあるが、他のタイプの無生物

3) 大曾・滝沢 (1991) は、日本語においても無生物主語が自然に響く原因他動詞文の例を2つ挙げてい

主語他動詞文とは異なり、これは、英語に固有なある特質との関わりで説明することが可能のように思われる（斎藤（2001）を参照）⁴⁾。

しかし、実際のところ、日本語の原因他動詞文を十分な自然さをもたないものとして除外するとしても、意図性を他動性の定義に関わる基本的意味素性ではないと考えた場合には、井上（1994）、大曾・滝沢（2001）が挙げている残りのタイプの無生物主語他動詞文についても、典型的な他動詞文から離れた他動性の低い他動詞文という方向で説明することは難しいのではないだろうか⁵⁾。また、それが仮に可能であったとしても、1節で挙げた、補助動詞「～てくれる」を含む無生物主語他動詞文(15)（＝(2)）の自然さを、この他動性に基づいた観点から説明することは、なおいっそう難しいように思われる。

- (15) a. この本は有益な情報を提供してくれる。
 b. その博物館は私に歴史の重要性を理解させてくれた。
 c. 友人との歓談の一時が一学期間の疲れを癒してくれた。

「～てくれる」があることによって、他動性が大きく変化するようにも思われず、この補助動詞の有無によって、どうして無生物主語の容認可能性が大きく変わるのか、他動性のみを問題にする観点からは説明することが困難である。また、これまでみてきたように、他動性の基本的意味素性を被動作性とし、意志性を無関係なものと考えた場合、(16a, b) にみるような文法性判断は、更に説明が難しい。

- (16) a. 友人は有益な情報を提供してくれたが、私にはあまりよく理解できなかった。
 b.*この本は有益な情報を提供してくれたが、私にはあまりよく理解できなかった。

2つの文の対比から分かるように、無生物主語をとった場合の方が、結果（「私」が情報を受け取り、理解したということ）が保証されており、つまり、被動作性が高いということになるからである⁶⁾。

こういった補助動詞「～てくれる」を含む無生物主語他動詞文の存在は、日本語の無生物主語に対して、本節でみてきたような他動性に基づく説明とは全く別種の説明が必要であることを示しているように思われる。次節では、久野の視点理論に基づいた説明を試みたい。

ゝる。1つは感情描写文（(i), (ii)）、もう1つはヲ格名詞と動詞が語彙的コロケーションを形成する場合（(iii), (iv)）である。

(i) 彼女の美しさが彼を魅了した。
 (ii) 私の批判は彼女をひどく傷つけたようだ。
 (iii) 社長の放漫経営が会社に大きな損害を与えた。
 (iv) 彼の不注意が事故を招いた。

ヲ格名詞と動詞が語彙的コロケーションを形成する例については本稿では扱わないが、感情描写文については5節で言及する。感情描写文は、他の原因他動詞文とは別扱いする必要があるように思われる。

4) この原因他動詞文が、日本語の場合とは異なり、英語でなぜ自然な表現になるのかについては、斎藤（2001）で既に論じている。

5) 特に、自然現象他動詞文の場合、他動性がそれほど低いとは思われない。

6) (16a) の「友人」を、情報を与えるという意志をもつ動作主ではなく、単なる情報源と解釈するようにすればするほど、この文の容認度は落ちてくるように思われる。つまり、ここにおいても、意志性と被動作性は、一方が強くなれば、他方は弱まるという関係がみられる。

3. 視点と無生物主語

補助動詞「～てくれる」を用いることにより、なぜ無生物主語の容認度が高まるのか。補助動詞「～てくれる」のどのような特質が、無生物主語の容認可能性と関わるのか。それは、この表現が視点表現、つまり、話し手の視点がどこにあるかを示す表現であることと関係があるように思われる。以下、Kuno and Kaburaki (1977), 久野 (1978), Kuno (1987) などにおいて発展してきた久野の視点、あるいは共感 (empathy) の理論を簡単にみておきたい。

話し手がある出来事を記述しようとする際に、その状況に関わっているどの人物や物に共感を寄せて記述するかによって、幾つかの表現方法が存在する。例えば、今仮に、太郎が花子にギリシャ語を教えたという出来事があったとする。この出来事を記述する場合に、太郎と花子のどちらに共感を寄せて記述するかに応じて、少なくとも、次の3つの表現方法が考えられる。

- (17) a. 太郎は花子にギリシャ語を教えた。
- b. 太郎は花子にギリシャ語を教えてやった。
- c. 太郎は花子にギリシャ語を教えてくれた。

(17a) は、両者に対してほぼ中立の視点から記述しており、(17b) と (17c) は、同一の出来事をそれぞれ太郎と花子の視点から記述している。つまり、「～てやる」を用いた場合は、主語寄りにその出来事を描写し、「～てくれる」を用いた場合は、非主語 ((17c) の場合は与格目的語) 寄りにその出来事を描写することになるわけで、この点を久野 (1978) は次のように定式化している。

- (18) a. 「～てやる」: E (主語) > E (非主語)
- b. 「～てくれる」 E (非主語) > E (主語)

E は empathy の頭文字で、E (x) は、文中の名詞句の x の指示対象に対して話し手がかつ共感度の強さを表す。(18)の定式化から、「～てやる」を用いる場合、話し手は主語よりも主語寄りの視点をとっていることを意味し、「～てくれる」を用いる場合は、逆に主語よりも非主語寄りの視点をとっていることを意味している、ということが分かる。このような特定の語彙によって決められる共感関係以外に、Kuno and Kaburaki (1977), 久野 (1978), Kuno (1987) では、例えば、次のような一連の視点の階層が提案されている。

- (19) 表層構造の視点の階層：一般的に言って、話し手は、主語寄りの視点をとることが最も容易である。目的語寄りの視点をとることは、主語寄りの視点をとるより困難である。受動態の旧主語 (対応する能動文の主語) 寄りの視点をとるのは、最も困難である。
E (主語) > E (目的語) > E (受動態の旧主語)
- (20) 発話当事者の視点の階層：話し手は自分の視点をとるのが最も容易である。聞き手の視点をとるのが次に容易である。そして、3人称の視点をとるのは、最も困難である。
E (1人称) > E (2人称) > E (3人称)
- (21) 談話主題の視点の階層：談話に既に登場している人物に視点を近付ける方が、談話に新しく登場する人物に視点を近づけるより容易である。

E (談話主題) $\geq E$ (新登場人物)

(22) 人間性の視点の階層：人間，人間以外の動物，物の順に視点をとることが容易である。

E (人間) $> E$ (人間以外の動物) $> E$ (物)

更に，(23)にまとめられるような一般的制約が働いているとされる。

(23) 視点の一貫性：単一の文は，共感度関係に論理的矛盾を含んでいてはいけない。

以上のような視点の階層と制約から，例えば，次のような表現の容認度の低さが説明されることになる。

(24) a. *太郎は僕にギリシャ語を教えてやった。

b. *僕は花子にギリシャ語を教えてくれた。

c. ?? その時，太郎が僕になぐられた。

(久野 (1978) : 146)

d. ?? ある女優が太郎と結婚した。

(高見 (1997) : 99)

e. *このコンピューターは太郎に使われている。

(高見 (1997) : 100)

(24a) では，「～てやる」が要求する視点が E (太郎) $> E$ (僕) であり，発話当事者の視点の階層が要求する視点が E (僕) $> E$ (太郎) であり，論理的矛盾が含まれ，(23)に違反している。(24b) では，「～てくれる」は要求する視点が E (花子) $> E$ (僕) であり，発話当事者の視点の階層が要求する視点が E (僕) $> E$ (太郎) であることから，同じく(23)に違反している。(24c) では，表層構造の視点の階層と発話当事者の視点の階層が要求する視点が，(24c) では，表層構造の視点の階層と談話主題の視点の階層が要求する視点が，それぞれ論理的矛盾を含む。無生物主語を含む (24e) は，表層構造の視点の階層が要求する視点が E (このコンピューター) $> E$ (太郎) であり，人間性の視点の階層が要求する視点が E (太郎) $> E$ (このコンピューター) であることから，やはり論理的矛盾を含んでおり，(23)に違反している。

次に，(25)の文を考えてみよう (例文は高見・久野 (2002 : 353) からの引用)。

(25) a. *太郎が私を訪ねた。

b. 太郎が私を訪ねてきた。

c. 太郎が私を訪ねてくれた。

(25a) は，表層構造の視点の階層と発話当事者の視点の階層が要求する視点が，それぞれ， E (太郎) $> E$ (私)， E (私) $> E$ (太郎) であるため，(23)に違反し，不適格な文とされる。このように，主語にある名詞句よりも視点の階層の上で上位にある対象に対して何らかの動作がなされる場合には，高見・久野 (2002) が主張するように，視点の一貫性を守るために「～てくる」「～てくれる」のような話し手寄りの視点を明示する表現を用いなければならない。そうすると，これまでみてきたような，補助動詞「～てくれる」を用いることにより，無生物主語の容認度が大きく高まるという事実 (26 (= (2))) にも，同様の観点からの説明が可能になってくる。つまり，「～てくれる」が用いられていることによって，視点の一貫性が守られているということである。

- ②6 a. この本は有益な情報を提供してくれる。
 b. その博物館は私に歴史の重要性を理解させてくれた。
 c. 友人との歓談の一時が一学期間の疲れを癒してくれた。

補助動詞「～てくれる」を含む無生物主語他動詞文の適格性に対する、以上のようなアプローチは、文に現れる名詞句間のある種の優劣関係に基づくものであり、2節でみた、述語の意味を中心とする文全体の他動性にに基づいたアプローチとは異なるものであって、2つのアプローチの間には直接的な関連性はない。ところで、久野の視点理論は、特に無生物主語の適格性の条件を提案しようとするものではないが、同じく、文に現れる名詞句間の優劣関係に基づいていて、しかも無生物主語一般の容認可能性について説明を与えようとする研究が、角田(1991)にみられる。

角田(1991)は、Silverstein(1976)がもともとオーストラリア原住民語の格組織の問題に関連して提案した②7の名詞句階層が、日本語の無生物主語他動詞文の容認可能性の問題にも関わっていると主張している(②7において、左側の名詞句の方が階層上高い)。

代名詞			名詞			
1人称	2人称	3人称	親族名詞, 固有名詞	人間名詞	動物名詞	無生物名詞
						自然の力 の名詞
						抽象名詞, 地名

角田は、無生物主語の他動詞文であっても、②8のように、動作の及ぶ対象が、人間ではなく、②7の名詞句階層において無生物の主語よりも低いものならば、自然な表現となることを指摘している。

- ②8 a. 津波が三陸地方を襲った。
 b. 台風が九州を襲った。
 c. 大水が家屋を押し流した。

②8の無生物主語は、自然の力を表す名詞であり、また、目的語となっているのは地名などを表す名詞なので、②7の階層に従っている。このように、②7の名詞句階層に従っている限り、日本語でも無生物主語の他動詞文は容認されると、角田(1991)は主張している。2節でみた可能な無生物他動詞文のタイプも、人間が動作の及ぶ対象となる原因他動詞文を日本語では自然さに欠けるものとして除けば、このアプローチでほぼ説明が可能であると思われる⁷⁾。

しかし、無生物主語の問題だけではなく、この角田(1991)のアプローチは、久野が視点理論で説明していた②9のような例にも、説明を与えることができる。

- ②9 ?? その時、太郎が僕になぐられた。(=(24c))

②7の名詞句階層に従えば、僕(1人称)の方が「太郎」(固有名詞)よりも高く、階層上より低い名詞句が主語となっているため、非適格な文となっている、というわけである。この例から

7) ただし、無生物主語が目的語と同じ高さの階層の名詞句の場合には、違反にはならない、とする必要がある。

も分かるように、久野の視点の階層の理論と角田の名詞句階層の理論との間には、かなり共通性があるように思われる。実際、既に角田(1991: 47-8)も指摘するように、久野が提案している視点の階層は、部分的に⑦の名詞句階層を表していて、その幾つかを組み合わせることで、⑦の階層とほぼ同じものができる。⑦の名詞句階層が「話し手にとっての関心の度合を示す」(角田(1991: 40))ということであれば、当然、久野の視点の階層との関連はあきらかであろう⁸⁾。しかし、勿論、両者が全く同一というわけではない。今扱っている問題に関連して、最も大きな違いは、先にみた②4, そして次にみる③0のような「～てくる」「～てよこす」「～てくれる」などの視点表現を含む場合にみられる。こういった例の適・不適格性に対して、角田(1991)で提案されているままの形では、⑦の名詞句階層で説明することができず、もし説明を与えようとすれば、やはりどうしても久野が論じているような視点関係ということに配慮しなければならないように思われる。

③0 a. *太郎が私に嫌な電話をかけた。

b. 太郎が私に嫌な電話をかけてきた。

c. 太郎が私に嫌な電話をかけてよこした。

(高見・久野(2002: 353))

(30a)は、視点の一貫性を違反するために不適格な文となっているが、(30b, c)では、「～てくる」「～てよこす」のような話し手寄りの視点を明示する表現を用いることにより、違反は回避されている。名詞句間の階層上の優劣関係だけが問題とされる説明では、③0の文の容認度の違いは扱えない。そして、③0の文の適・不適格性をうまく扱えない以上、当然、角田(1991)のような名詞句の階層だけによる説明では、「～てくれる」を含む無生物主語他動詞文②0に対しても適切な説明が与えられない、ということになる。

4. おわりに

以上、補助動詞「～てくれる」を用いた無生物主語他動詞文を中心にみると、日本語の無生物主語に対する説明としては、久野が発達させてきた視点理論に基づく説明が最も優れているのではないかと、ということを見てきた。井上(1994)や大曾・滝沢(2001)の他動性に基づく説明では、意図性を他動性の基本的意味素性とは考えない場合、すべての可能な無生物主語他動詞文を周辺的な他動詞文とみなすことは難しくなるだろうし、また、「～てくれる」が関わる無生物他動詞文についても、適切な説明を与えることができない。一方、角田(1991)の名詞句階層に基づくアプローチは、述語の意味を中心とした文の他動性に基づく分析とは異なり、文の項となっている名詞句間の何らかの優劣関係に基づくという点で、視点の階層を用いたアプローチと似ている。また、両階層で捉えようとしていることに関しても、基本的な点で共通性があると考えられる。角田(1991)の研究は、実際にこの階層を用いて日本語の無生物主語他動詞文を分析しており、大曾・滝沢(2001)において日本語で可能な無生物主語他動詞文とされているものは(原因他動詞文を不自然な表現として除けば)、ほぼこの階層に従って自然な説明を与えることができるのではないかとと思われる。この階層は、また、無生物主語の問題だけでなく、複数個の名詞句の間で、どれが主語として選ばれるのが適切かをも規定している。

8) これらは、また、認知言語学で論じられる図 (figure) と地 (ground) の区別とも重なる概念である。図と地の区別については、Ungerer and Schmid (1996: Chapter 4) を参照。

ただ、前節の最後にみたように、「～てくる」「～てよこす」「～てくれる」などの視点表現が関わる場合には、角田（1991）の名詞句階層に基づくアプローチではうまく扱うことができず、したがって、「～てくれる」を用いた無生物主語他動詞文の自然さについては、他動性に基づいたアプローチ同様、適切な説明を与えることができない。この点から、視点の階層に基づいたアプローチの方が優れていると結論される。

最後に、1つ述べておかなければならない。これまでずっと、日本語では原因他動詞文は自然さに欠けていると述べてきたが、大曾・滝沢（2001）では、(31)のように感情を描写する文（感情描写文）は、同じ原因他動詞文でも、全く自然な表現であるということが指摘されている。

- (31) a. *彼女の美しさが彼を魅了した。
b. 私の批判は彼女をひどく傷つけたようだ。

ただ、このいわゆる「心理述語」を含む例は、これまでも多くの研究がある通り、例えば、(32)、(33)にみるような逆行束縛現象など特殊な言語現象を示し、何か特別な統語論的・意味論的な扱いが必要のように思われ、他の無生物主語他動詞文と同列に扱ってよいか甚だ疑問である⁹⁾。

- (32) a. 自分が癌かも知れないことが、太郎を悩ませた。
b. *自分の父親が太郎を叱った。
(33) a. A picture of himself in the morning paper shocked John.
b. *Articles about himself frequently attack the President. (高見（1997: 119, 120）)

むしろ、感情描写文を切り離した方が、無生物主語他動詞文というものに対して適切な一般化ができるのではないか、というのが今のところの考えである。

参 考 文 献

- Belletti, A. and L. Rizzi. (1988) "Psych-Verbs and θ -Theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.
Goldberg, A. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
Green, G. M. (1974) *Semantics and Syntactic Regularity*. Bloomington: Indiana University Press.
Hopper, P. J. and S. A. Thompson. (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse," *Language* 56, 251-99.
市川繁治郎他編（1995）『新編英和活用大辞典』東京：研究社。
井上和子（1994）「他動性と使役文」『言語理論と日本語教育の相互活性化』（津田日本語教育センター）85-102。
ヤコブセン、ウェスリー・M. (1989) 「他動性とプロトタイプ論」久野暉・柴谷方良編『日本語学の新展開』213-48. 東京：くろしお出版。
久野暉（1978）『談話の文法』東京：大修館書店。
Kuno, S. (1987) *Functional Syntax: Anaphora, Discourse and Empathy*. Chicago: University of Chicago Press.
Kuno, S. and E. Kaburaki. (1977) "Empathy and Syntax," *Linguistic Inquiry* 8, 627-72.
西村義樹（1998）「行為者と使役構文」中右実・西村義樹『構文と事象構造』107-203. 東京：研究社。

9) 逆行束縛現象に対して、視点理論の観点から機能論的に説明を与えようとする研究としては、特に高見（1997：第8章）を、また、生成文法理論の観点から統語論的に説明を与えようとする研究としては、特に Belletti and Rizzi (1988), Pesetsky (1995) を参照。

- 大曾美恵子・滝沢直宏（2001）「日本語における他動詞文の主語の有生・無生」『日本語電子化資料収集作成－コーパスに基づく日本語研究と日本語教育への応用を目指して－』（平成12年度名古屋大学教育研究改革改善プロジェクト報告書）53-63.
- Pesetsky, D. (1995) *Zero Syntax: Experiencer and Cascades*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 斎藤伸治（2001）「無生物主語構文について」『アルテス リベラレス』（岩手大学人文社会科学部紀要）68, 83-93.
- Silverstein, M. (1976) "Hierarchy of Features and Ergativity," in R. M. W. Dixon (ed.) *Grammatical Categories in Australian Languages*, 112-71. Canberra: AIAS, and New Jersey: Humanities Press.
- 高見健一（1997）『機能的統語論』東京：くろしお出版.
- 高見健一・久野暉（2002）『日英語の自動詞構文』東京：研究社.
- Taylor, J. R. (1995) *Linguistic Categorization*. Oxford: Clarendon Press.
- Ungerer, F. and H.J. Schmid. (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman.
- 角田太作（1991）『世界の言語と日本語』東京：くろしお出版.
- 柳沼重剛（1991）『語学者の散歩道』東京：研究社.